

「子育てネットワーク」活動の体系的把握の試み —「子育てネットワーク」に関する論文、雑誌記事の検討から—

中京女子大学 中谷奈津子
聖和大学 橋本 真紀

I. 目的

「子育てネットワーク」と称される活動が確認されるようになったのは、1980年代後半である。^{注1}しかし2001年「こころの子育てインターねっと関西」が実施した全国調査「こころの子育てインターねっと関西2001」では、1997年～1998年において26組織と最も多くの「子育てネットワーク」が発足されたと報告されている。

またこのような「子育てネットワーク」は、子育ての当事者が、自らの子育てに関わる個人的な欲求の解消を契機として集い、段階を経て社会的な取り組みに発展することが、実践報告、事例研究などにより紹介されている〔木脇1998, 相戸2001, 恒吉1998, 白神2001, 河野2002, 斉藤2002, 坂本2003〕。

ただこれまで紹介されてきた「子育てネットワーク」組織の実態や活動内容は、“個々”の実践事例から抽出されているため、「子育てネットワーク」の組織や活動における共通の特性を明示するものではない。今後の子育て支援において、「子育てネットワーク」がその一翼を担い、またその活動が発展することにより豊かな子育てが実現され、地域の再構築に貢献すると考えられるなら、「子育てネットワーク」に対して何らかの援助を行っていく必要がある。

このような見解から、本調査では「子育てネットワーク」と称される活動の体系的把握を目的として、「子育てネットワーク」に関する論文、雑誌記事の記述をKJ法により整理し、分析を行った。「子育てネットワーク」の実践者やその支援者、研究者、報告者がどのような活動を「子育てネットワーク」と捉えているのか、また子育てネットワークが生じる背景、その機能や要素、効果について検討し、体系的把握を試みることを目的とする。

II. 調査方法

1. 調査対象

国立国会図書館雑誌記事索引検索において「子育てネットワーク」「育児ネットワーク」をキーワードに抽出された91論文。

2. 調査実施時期

2006年2月～3月

3. 分析方法

「子育てネットワーク」は未だ体系化されていない概念である。様々な事例や観察・活動記録等として報告されているデータを、統一的にとらえるために、分析方法としてはKJ法〔川喜田1970〕を用いた。KJ法は、混沌とした現実のなかから、何らかの秩序を見出して体系づける手法として用いられている。

分析に入る前段階の整理として、対象となった91論文の中から、①「子育てサークル」（親子で集まって遊ぶなど、主として個人的な欲求を満たすための活動〔橋本・中谷・金山2006；112〕）、②「育児ネットワーク」（現代社会において育児の主な担い手となっている母親に対して、直接的・間接的に

関わり、母親に対して各種の育児の援助を行う人々 [松田2001;34])、③「子育て支援ネットワーク」(子育て支援を職務としている、もしくは職務の一部に含む行政や専門機関、専門職が連携して子育て支援活動を行うことを目的とした活動)に関して中心的に記述されていると判断された14論文を省き、その結果得られた77論文を分析対象とした。①②③の各論文数は、①…0、②…3、③…11である。

以下にKJ法による分析の手続きを示す。

第1ステップ「紙きれづくり」；各論文における「子育てネットワークとは」と定義づけられた記述を抽出した。また特に定義づけられていない場合には、報告している組織が示していると考えられる「子育てネットワーク」の具体的記述を抽出した。抽出した各記述を一文ごとに分割し、意味の通じない文章を省き、特に長い文章については、意味が分かれるところで分割した。最後に各記述を一文ごとにカードに貼り付けた。カード化した「紙きれ」は210枚となった。

第2ステップ「グループ編成」；カード化した「紙きれ」について、互いに親しいと感ずるカードを同じ場所に集め、小グループを編成した。それに伴い、それら小グループに適切な表札をつける。第2段階として、その小グループの表札をもとに、一段上の次元のグループ編成を行い、さらに表札を設定した。さらに第3、第4段階と同じ作業を繰り返した。グループ編成は第4段階で10以内となり、終了とした。

第3ステップ「A型図解」；最後にまとめられたグループ(ユニットという)について、「どのような相互関係に配列すれば、最も首尾一貫した構図ができるか」という観点から空間配置を行う。その後、順次1次元低いユニットを取り出し、再び空間配置を行う。空間配置が適切な位置になったら、それを図解化し、グループごとの境界線を記し、A型図解を完成させた(図1)。

Ⅲ. 結果及び考察

グループ編成は第4段階において4つに分類することができた。それぞれ、「子育てネットワークが生じる背景」「子育てネットワーク」「子育てを支える他のネットワーク」「専門職・専門機関」と命名された。それらの分類を構成する第1段目の表札は、「子育てネットワークが生じる背景」が5、「子育てネットワーク」が33、「子育てを支える他のネットワーク」が3、「専門職・専門機関」が3であった。

以下、図解に基づき、各要素や要素間の関係性について述べる。

1. 「子育てネットワークが生じる背景」について

「子育てネットワークが生じる背景」は、「生物学的背景」「社会的背景」「世代間ギャップ」「渴望」「“個”であることの弱さ」から構成される。生物としての人間は、社会的な動物であり、人との交流 [秋山1998;38] が不可欠である。しかし近年、一昔ならごくありふれた、挨拶を交わすというような風景でさえ姿を消し [丸野1992;28]、子どもや母親、家族が孤立した状態にある。さらに「母親だから我慢するのは当たり前」という考えの、ひとつ上の世代の母親たちとのギャップ [三沢1997;41] が、現代の母親たちをストレスフルな状況へと追いやっている。また母親自身の話し相手、子どもの遊び相手がなかなか見つからず、多くの親が子育てに自信を持ってない [座談会1998;22] 現状もある。そうした渴望した状況が、子育てに必要な環境を自分たちで整えていこうという親たちの動き [白石1999;32] につながるものと考えられる。そのために、「子育てネットワーク」が構築され、さらに「子育てを支える他のネットワーク」が求められていくものと思われる。

2. 「子育てを支える他のネットワーク」について

「子育てを支える他のネットワーク」は、「単なる育児援助」「インターネットによるネットワーク」「子育てサークル」から構成される。育児を主に担う母親に対しては、直接・間接に育児の援助 [松

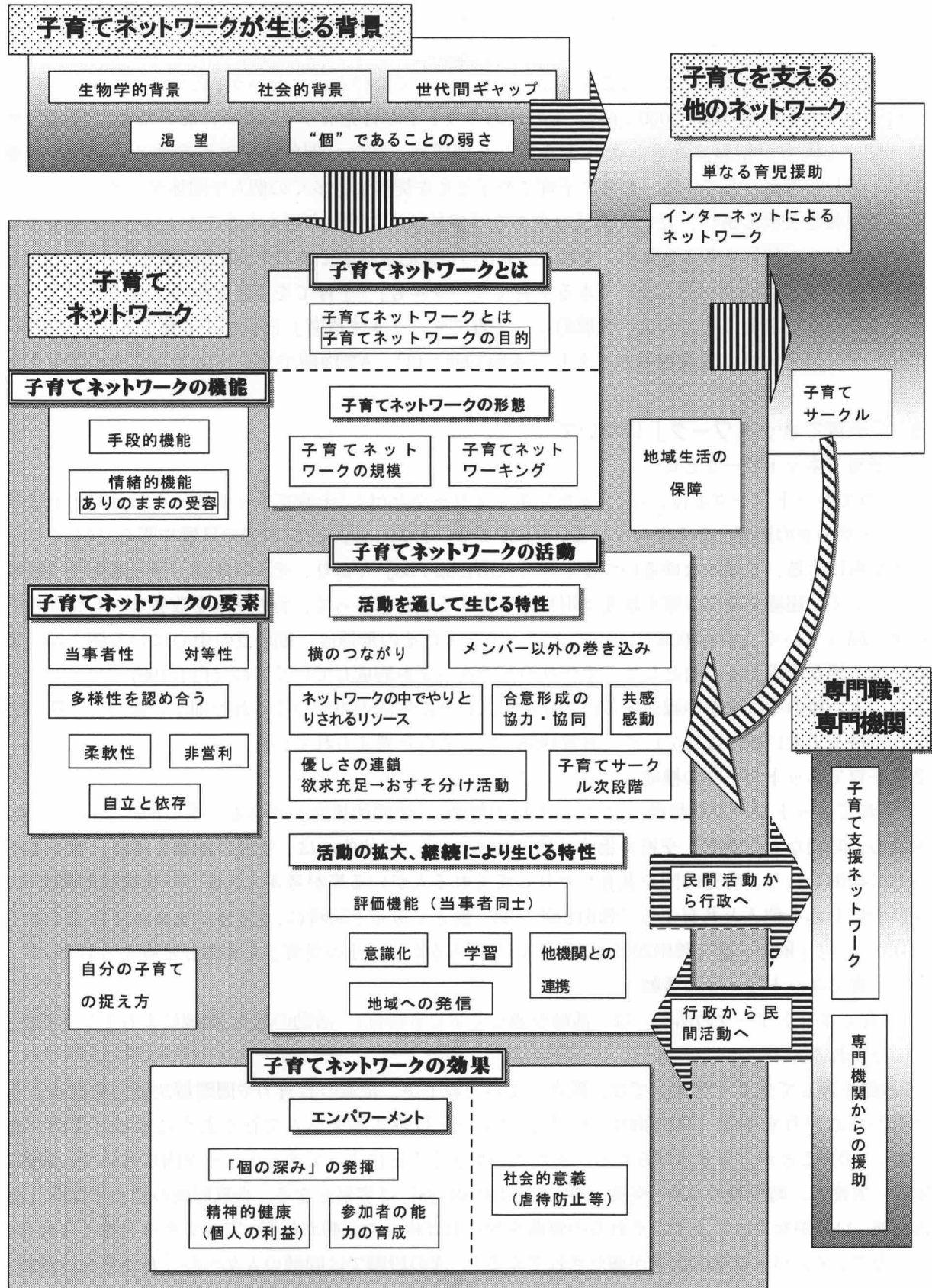


図1 KJ法による「子育てネットワーク」のA型図解

田2002；37]を行うことが必要である。育児援助が脆弱であれば、母親たちはますます孤立し、負担を抱え込む。ひとつのサポートネットワークとしてインターネットが考えられる。インターネットは匿名が原則であるため「いまさらこんなこと恥ずかしくて聞けない」ということであっても、心を開き相談を持ち込める〔横堀2000；64〕。そのためネット上の育児ネットワークにおいても、“生の”仲間と話をしたり、情報交換をしたりすることと同様に、親の心理的健康に貢献する〔徳田・伊藤2004；65〕と考えられている。さらに子育てや子どもを契機に、多くの個人や団体が、インターネット上で情報を交換しあい、互いに結びつきある〔望月2001；74〕実態もあることから、「子育てネットワーク」への移行も考えられた。また、当事者の自発的な活動であるが、最も組織化されていない、個人グループ〔座談会1998；23〕である子育てサークルも、「子育てを支える他のネットワーク」と捉えることができる。それらは、発展的に「子育てサークル次段階」として「子育てネットワーク」に移行する場合があると報告されており〔木脇1998；13〕、A型図解では矢印によってその状況を表した。

3. 「子育てネットワーク」について

1) 子育てネットワークとは

「子育てネットワークとは」は、「子育てネットワークとは」「子育てネットワークの目的」および「ネットワークの形態」から成っている。「子育てネットワーク」とは、共通の目標や関心、利益を持った人たちによる、自発的なゆるいつながり〔秋山1998；38〕であり、その目的は、子どもを持つ親を中心として、組織や機関の壁を超えて相互に連携することによって、育児状況を改善し、育児問題の解決を図っていく〔中村2005；117〕ことにある。またその形態は、網の目の中心にいる個人が、情報交換や相互の協力を目的として“手作りの”グループを形成していくもの〔白石1997；74〕であり、また、太い線の中に細かい線があるのではなく、日々の生活の中でつくられた細かい線が、次第に広がりを持って太い線になっていく〔有賀1998；71〕ものと考えられている。

2) 子育てネットワークの機能

「子育てネットワークの機能」には、「手段的機能」「情緒的機能」がある。手段的機能は、知識、労働力、時間などの共有、交換を指す〔秋山1998；38〕。具体的には、育児の知識を得る、育児を直接的に援助したり、育児時間を共有したりしてくれる人がいる等が考えられる。一方情緒的機能は、喜びや悲しみを他人と共有する〔秋山1998；38〕働きであると同時に、「本当に生まれてきてくれてありがとう」〔相戸・園・稗田2005；74〕という「あるがままの受容」をも含むと考えられた。

3) 子育てネットワークの活動

「子育てネットワークの活動」は「活動を通して生じる特性」「活動の拡大、継続により生じる特性」に区分される。

「活動を通して生じる特性」では、孤立していた親子が、地域の教育力や問題解決能力を高めようと横のつながりを強化〔原田2004；9〕し、メンバー以外も巻き込んで行くようになる〔江口・森2003；110〕ことが、まずあげられる。また人が集まることによってネットワーク内において、資産、知識、労働力、時間等の共有・交換・利用〔秋山1998；38〕は容易となる。合意形成の協力や協同〔恒吉1998；11〕がなされた上で、それらの資源を用いれば様々な活動が展開・実現できると考えられる。

一方で、メンバー自身の欲求が満たされてくると、次の段階では同種の人々への「おすそわけ活動」が始まる〔白石1997；82〕とされている。つまり、メンバーや親子の優しい気持ちや、次のメンバーや親子へと伝わり、連鎖していくのである。こうして「指導する・される、支援する・される」関係ではない、「うんうんそうなんだー、あなたに会えてよかった」という共感〔相戸・園・稗田2005；

77]の気持ちが芽生えていく。試行錯誤の毎日の中で、受け止めてくれる人やがんばっている人たちと出会い、感動していくことで、さらに人と人とのつながりが容易となる[村田1989;56]。そのような特性が「子育てネットワーク」にはあると考えられた。さらに先の子育てサークルから、子育てネットワークへの広がりをもよおせる組織もみられ[相戸・園・稗田2005;73]、これを「子育てサークル次段階」と表した。

「活動の拡大、継続により生じる特性」として、まず「当事者同士の評価機能」があげられる。「こんな人になりたいという人が身近にいて、その人から“すごいね”といわれることが励み」になったり、仲間同士で評価し合えることで自分たちの成長[村田1990;62]を実感できたりすることは、恐らく次の活動への動機づけを強化する。また、自分たちの活動が外部講師によって理論化される、マイナスの評価ばかりし合っていた人々が、実際の生きた人々と触れるなかで物事の見方を変えていく等、自分たちの活動の意義や価値をしっかりと「意識化」していけることも、活動の継続による特性と考えられる。そうした意識化を契機に、更なる学習へと向かうこともある。実際に子育てだけでなく、女性問題に対する学習や親の自己実現のための学習[恒吉1998;10-11]につながった事例も報告されている。さらに意識化や学習の成果から、地域の代弁者として発信できる[木櫛2004;54]力量を備えて行くことも、活動の継続に伴って期待されることのひとつと考えられる。地域への発信は、他機関との連携にもつながる。また、すべてのケースを対応するためには多くの人材が必要であり、かつ同様の活動をしている団体[木村1998;35]や他機関との連携が求められる。さらに活動の質的向上をめざすためには、グループの外からの刺激や協力も有効とされ、子育てに関する専門機関からの援助も必要[白石1997;126]とされている。他機関との連携を果たしていく中で、刺激やヒント、アドバイス、具体的な援助など様々な資源へのアクセスが容易になり、活動や組織はさらに構造化され発展していくものと予想される。

4) 子育てネットワークの要素

「子育てネットワークの要素」は、「当事者性」「対等性」「多様性を認め合う」「柔軟性」「非営利」「自立と依存」の6つとなった。これらは「子育てネットワーク」を成り立たせている基本的な内容や条件であると考えられる。

「子育てネットワーク」誕生の芽は、子育て当事者たちの“藁をもすがる思い”の中に存在[坂本2003;32]しており、母親たちの個別の子育て要求に導かれ必要に迫られ、自然発生的に作られて行ったとみるほうが妥当[河野2002;38]という見方がある。専業主婦の社会的孤立や不安を背景に、そこから行動を起こし、生活者の視点から自由につながる仕組みをつくってきた[相戸・園・稗田2005;76]という点で、子育てネットワークは非常に当事者性の強い組織である。それと同時に互いに対等であることから関係が始まる[秋山1998;41]組織でもある。だが、参加してくる親子の当初の目的は多種多様であり、親子の生き方や意見も同一ではない。しかしメンバーの自発性を損なわない、全体の方向性をコントロールするという意味で、個人の違いを尊重し、自分が自立し、お互いが理解するという姿勢が重要視されている[秋山1998;41]。ほとんどの場合、子育て中であることが前提となるが、組織によっては、「毎年絶対にしなければならない」と決まっている活動はなく、「無理のない活動量とテンポ」が重視されている[相戸・園・稗田2005;73-77]。つまり活動の柔軟性も求められるのである。

その他、江口らは活動に「営利を目的としないこと」を子育てネットワークの条件として位置づけている[江口・森2003;110]。さらに西村はネットワークの特性を「自立と依存の統一」と指摘している[西村1991;30]。川野も、ボランティア・NPOと行政との関係は、相互に依存しながら自立性

を保とうとする関係が望ましいとする [川野2004; 185]。これからの子育てネットワークは、他機関との関係においても、依存関係に陥らず、相互依存の上での自立をめざすことが求められるものと考えられる。

5) 子育てネットワークの効果

「子育てネットワークの効果」は、「エンパワーメント」と「社会的意義（虐待防止等）」に区分される。

子育て当事者たちが活動を継続していく中で、子育てに関する喜びや悲しみを共有していく姿は充分予想されることであり、それが人間の精神的安定や精神的健康につながる [秋山1998; 38] とされる。久木田によれば、エンパワーメントの前提は、人間の基本的ニーズがある程度満たされ心身ともにパワーを持った状態を前提としている [久木田1998; 27]。精神的安定や精神的健康とは、その基本的ニーズの充足の段階に相当すると考えられる。またエンパワーメントは「参加」のプロセスに取り込まれると促進される [久木田1998; 28-29]。活動での報告、報告を文章化すること、互いに評価しあうこと。こうした一連の取り組みの中で、ぐんと力をつけていく母親たちの姿 [村田1990; 60] が報告されている。そこでは、個人が集団に埋没することなく、それぞれの方向性をもつ個人として生き、独自の役割を個性的に発揮していくこと [西村1991; 27] が同時に求められているとも考えられる。

こうした「子育てネットワーク」は新たな社会的資源としても位置づけられ、虐待防止や子育て支援にも有効 [渡邊2005; 138] であるとされている。

6) 地域生活の保障

子育て中の親子は、子育てに関わる地域の様々な問題や疑問に遭遇する [坂本2003; 33]。人は地域で生まれ、育ち、働き、生活していく。地域においては子どもたちの成長の見通しを保障すること [恒吉1998; 11] が求められる。換言すれば、子どもも大人も地域とともに育つ（共育）ネットワークをつくり出すチャンス [西村1991; 27] として子育てネットワークをとらえていくことが求められているとも考えられる。

7) 自分の子育ての捉え方

組織が発展し活動数が増えると、子育て当事者の負担は増加の一途をたどるように思われる。そのような中「がんばりすぎて、自分の子育ての足元が崩れないように気をつけている」 [相戸・園・稗田; 2005; 74] と、子育てと活動のバランスのとり方が課題となっている現状もみられた。

4. 「専門職・専門機関」について

「専門職・専門機関」は、「専門機関からの援助」「子育て支援ネットワーク」「行政から民間活動へ」から成っている。専門機関からの援助としては、行政 [藤岡1992; 14]、保健所 [村田1990; 56]、医療機関 [藤岡1992; 13]、学校 [杉野2002; 49]、幼稚園 [有賀1998; 71]、保育所 [藤岡1992; 12]、地域子育て支援センター [神田・山本2001; 86]、児童委員 [藤岡1992; 15]、公民館 [村田1990; 55]、図書館 [手塚1988; 83] などがあげられた。それらが拠点となり、親子のパイプ役となつてつながっていく、その日常こそが、最も重要視されている [有賀1998; 72]。また「子育て支援ネットワーク」は、もともとある施設・機関が横のつながりを作りながら地域の母子のために施策を立て、援助の手をさしのべる [座談会1998; 23] ものとなれ、従来の蓄積が改めて有機的に結び合い、変革の原動力になる [望月2001; 74] ことが期待されている。また、子育て支援を必要とする人の目線に立った子育て支援について、地域全体が持続的で柔軟に取り組んでいくために、行政主導から民間活力を活用した新しい子育て支援体制へと [東成瀬村子育て支援ネットワーク協議会2005; 47] 移行する動

きも認められている。

Ⅳ. まとめ

「子育てネットワーク」をキーワードにKJ法を行った。その結果、論文や記事の執筆者の語る「子育てネットワーク」には大きく分けて4つのグループが存在することが明らかになった。それは、「子育てネットワークが生じる背景」「子育てネットワーク」「子育てを支える他のネットワーク」「専門職・専門機関」である。論文や記事の執筆者が「子育てネットワーク」と語っていたとしても、それらは単なる「子育てサークル」や「子育て支援ネットワーク」、また松田のいう「育児ネットワーク」と称した方がふさわしい活動の可能性もある。

KJ法によって整理された「子育てネットワーク」とは、共通の目標や関心、利益を持った人たちによる自発的なゆるいつながりであり、その目的は、子どもを持つ親を中心として組織や機関の壁を超えて相互に連携することによって、育児状況を改善し育児問題の解決を図っていくことにあった。また当事者性、対等性をはじめとした6つの要素が抽出され、活動の効果として個人のエンパワーメントや社会的意義なども予想された。本論の結果が子育て環境の実態に沿うものであるならば、個人のエンパワーメントや社会的意義などの効果が期待される「子育てネットワーク」は、今後さらにその発展が望まれるところである。またそのような組織を維持・発展させていくような、何らかの援助も積極的に探求し、行っていく必要があると思われる。

今回は、子育てネットワークの論文、雑誌記事の記述をもとに分析したが、活動報告や情報発信に積極的ではないネットワークも存在すると考えられる。今後は、インタビューなどの質的調査も視野に入れながら、「子育てネットワーク」の実態をより明確に捉える必要があると考える。またKJ法の空間配置は、誰がやっても同じような種類の空間配置になるわけではない[川喜田1970; 81]。つまり主観的な分析に偏っている部分もあると考えられ、今後はテキストマイニング等のコンピューターソフトを使用し、より客観的な分析を試みたいと考える。

<注>

注1 国立国会図書館雑誌記事索引検索において「子育てネットワーク」「育児ネットワーク」をキーワードに検索した結果、1980年代のものが最も古いものであった。

<参考・引用文献>

- 相戸晴子 2001「子育てネットワークの必要性と課題について―筑豊子育てネットワークの活動事例より―」『生活体験学習研究』(1)71-80
- 相戸晴子・園真紀子・稗田佳子 2005「筑豊地域にける『子育てネットワーク』八年間のあゆみ」『月刊社会教育』49(54)72-77
- 秋山弘子 1998「“違い”を認め、共に育ち合う」『母の友』(539)38-41
- 有賀和子 1998「子育てネットワークづくり」『初等教育資料』(683)70-76
- 江口愛子・森未知 2003「子育てネットワーク等子育て支援団体についての情報提供のあり方に関する調査研究」『国立女性教育会館研究紀要』(7)109-117
- 原田正文 2004「子育てを変えるエネルギーの源『子育てネットワーク』『こども未来』(398)7-9
- 橋本真紀・中谷奈津子・金山千広 2006「子育てネットワークの実態Ⅰ」『聖和大学論集教育学系・人文学系』(34)AB111-121
- 東成瀬村子育て支援ネットワーク協議会 2005「子育てするならわがまちで」『マナビィ』(46)45-47
- 藤岡佐規子 1992「子育て家庭支援のためのネットワークと保育所の課題」『教育と医学』40(1)9-15
- 川喜田二郎 1970『続・発想法―KJ法の展開と応用』中公新書

「子育てネットワーク」活動の体系的把握の試み

- 川野祐二 2004「協働、パートナーシップ、ネットワーク」田尾雅夫他編『ボランティア・NPOの組織論』学陽書房182－194
- 神田直子・山本理恵 2001「乳幼児を持つ親の、地域子育て支援センター事業に対する意識に関する研究」『保育学研究』39(2) 80－86
- 木籬聖子 2004「地域との協働による母子保健活動」『月刊地域保健』35(8)48－54
- 木村結 1998「子どもと向きあえるおとなをめざして」『月刊社会教育』42(3)30－35
- 木脇奈智子・大山治彦 1998「地域における子育て支援」『家庭教育研究所紀要』(20)137－147
- 木脇奈智子 1998「子育てネットワークに関する考察」『家族関係学』(17)13－22
- こころの子育てインターねっと関西 2001『ひろがれ！子育てネットワーク』こころの子育てインターねっと関西
- 河野和枝 2002「支えあう子育て活動と親の学習過程」『社会教育研究』(20)37－53
- 久木田純 1998「エンパワーメントとは何か」『現代のエスプリ』(376)10－34
- 丸野俊一 1992「子育ての原点を求めて」『教育と医学』46(1)24－30
- 松田茂樹 2001「育児ネットワークの構造と母親のWell-Being」『社会学評論』52(1)33－170
- 松田茂樹 2002「育児ネットワークの構造とサポート力」『家族研究年報』(27)37－48
- 三沢昌子 1997「情報NPOが地域をつくる」『社会教育』52(2)38－41
- 望月彰 2001「地域子育てネットワークと社会教育の課題」『月刊社会教育』45(2)70－74
- 村田和子 1990「親がつながる地域づくり」『月刊社会教育』34(10)54－63
- 中村真弓 2005「地域における育児ネットワークに関する研究」『九州大学大学院教育学コース院生論文集』(5)105－118
- 西村美東士 1991「社会教育の新しい展開からみた学校週五日制」『季刊教育法』(86)27－33
- 斉藤進 2003「子育てネットワーク活動の意義とその育成支援に関する研究」『厚生労働省科学研究報告書』91－102
- 坂本純子 2003「“子育てインフラ”として、子育てネットワークづくり」『月刊福祉』86(1)32－37
- 白石淑江 1997「子育てネットワークづくりに関する研究」『同朋大学論叢』(76)67－85
- 白石淑江 1999「子育てネットワークづくりの広がり」『子どもの文化』31(8)32－41
- 白神利恵 2001「『子育てネットワーク』から『地域コミュニティ』へ」『大阪女子大学人間関係論集』(18)113－131
- 杉野裕子 2002「現代の子育てと育児ネットワーク」『母子研究』(22)38－53
- 手塚英男 1988「地域の子育てネットワークと図書館」『現代の図書館』26(2)80－83
- 徳田由紀子・伊藤裕子 2004「インターネット上の育児ネットワークが母親の育児意識に及ぼす影響」『児童学研究』(6)65－73
- 恒吉紀寿 1998「子育てネットワークから始まる可能性」『月刊社会教育』第42巻第3号 6－11
- 座談会 1998「広がる“子育てサークル”」『母の友』通号539号22－30
- 渡邊寛 2005「ケアと子育てネットワークの新しい価値」『母子保健情報』(50)138－141